

◇原爆とへひと ①

ジヨルジュ・ムスタキ

野坂昭雄

エジプトのアレキサンドリアに生まれたギリシヤ人で、フランス語で歌った歌手のジヨルジュ・ムスタキ(一九三四～二〇一三)は、親日的でいく度か来日している。もちろん直接的に原爆と関係しているわけではないが、彼は「ヒロシマ」という曲を歌っている。これは反戦平和の歌として知られ、うたごえ運動の中でもしばしば歌われた。

Par la colombe et l'olivier

(鳩とオリーブの木により)

Par la déresse du prisonnier

(囚人の苦しみにより)

Par l'enfant qui n'y est pour rien

(なんら咎のない子供たちにより)

Peut-être viendra-t-elle demain

(彼女はたぶん明日やって来るだろう)

Avec les mots de tous les jours

(日々の言葉とともに)

Avec les gestes de l'amour

(愛の表現とともに)

Avec la peur avec la faim

(怖れ、そして飢えとともに)

Peut-être viendra-t-elle demain

(彼女はたぶん明日やって来るだろう)

Par tous ceux qui sont déjà morts

(すでに死んだ者たちすべてにより)

Par tous ceux qui vivent encore

(まだ生きている者たちすべてにより)

Par ceux qui voudraient vivre enfin

(つまりは生きたいと望むものたちによって)

Peut-être viendra-t-elle demain

(彼女はたぶん明日やってくるだろう)

Avec les faibles avec les forts

(弱者たちとともに、強き者たちとともに)

Avec tous ceux qui sont d'accord

(合意する者たちすべてとともに)

Ne seraient-ils que quelques-uns

(たとえそれがわずかの人々にすぎなかったとしても)

Peut-être viendra-t-elle demain

(彼女はたぶん明日やってくるだろう)

Par tous les rêves piétinés

(踏みつけられた夢によって)

Par l'espérance abandonnée

(放棄された希望によって)

A Hiroshima ou plus loin

(ヒロシマに、あるいはもっと遠いところに)

Peut-être viendra-t-elle demain

(彼女はたぶん明日やってくるだろう)

LA PAIX

(平和は！) (注)

一九七三年の東京音楽祭で初来日したムスタキだが、『ムスタキ自伝 思い出の娘たち』(山口照子訳、彩流社、一九九九)によれば、来日以前、日本に対するイメージは次のようなものだった。

春のある朝、桜の花咲く季節に東京に降り立つまでは、僕にとつて日本とは人口が密集し、西洋の技術文明を摸倣する技術——そしてそれを越える技術——にかけては天才的で、ヒロシマの敗者が彼らの伝統と精神性を放棄しつつ、勝者の価値観に同調しているといったくらいに漠然とした小国でしかなかった。ヴィクトリア王朝時代的な厳格さ、馬鹿丁寧にべこべこすること、常に自制心を失わないこと、能率のよさ、何が何でも時間を厳守すること、これらに対しては何の魅力も感じない。

来日後、こうした彼の先入観は変わっていくことになるが、少なくとも「ヒロシマ」が発表された一九七二年の時点では、彼はヒロシマをかなり抽象的にしか把握していなかったと見てよい。この曲は、『ムスタキ アルバム』(発行・水星社、発売・音楽之友社、発行年月不詳)というムスタキの楽譜集で、ヒロコ・ムトーによる日本語詞が掲載されているが、それは原曲とは全く異なった内容となっている。

憶えていますか
あの焼野原に
みどりの草木が
芽生えた嬉しさを

忘れていませんか
平和を求めて
生命を落した
あの若者達を

いくさはあれから
何を残した
微笑うばい
涙さえうばい

ビルが建ち並び
傷あとをかくす
明日は来るだろう
たぶん明日は来る

かげりを知らない
世代が町ゆく
何時か遠くなる
遠くヒロシマが

何時か遠くなる
遠くヒロシマが
何時か遠くなる
遠くヒロシマが

作詞家・脚本家として活躍するヒロコ・ムトーは、一九六八年に青山学院大の仏文学科を出ており、ムスタキの詩をいくつか日本語訳している。その中でも「ヒロシマ」は恐らく最もよく知られたもので、うたごえ運動最盛期のかなり後に作られたにもかかわらず、現在でもヒロコ・ムトーの訳詩で「原爆を許すまじ」などと共に反戦・平和歌集に収められている。ちなみにムスタキは、五月危機が起こった一九六八年、自らのギリシヤ人としてのアイデンティティを歌った「異国の人」がヒットし、政治的なメッセージ色の濃い曲を作っていく。『ムスタキ アルバム』中の三橋一夫「ジョルジュ・ムスタキについて」という解説によれば、彼自身が「亡命ギリシヤ人の子」として「漂泊」の人生を送る運命を受け止めていたようだ。

さて、二つの日本語詞を比較すると、ムトーの歌詞には日本側の想いに強く彩られていることがはっきりと分かる。例えば「憶えていますか／あの焼野原に／みどりの草木が／芽生えた嬉しさを」という1番の歌詞は、五〇年は草木も生えないといわれた広島島の復興を、身を以て体験した者の視点から発せられている。そして「憶えていますか」「忘れていませんか」と聴く者に語りかける口調を通して、この曲（一九七二）が作られた当時、つまり戦後二五年以上を経た時点での状況を想起させようとしている。

当時は、「戦争を知らない子供たち」（北山修作詞、一九七〇年）がヒットしたが、戦争を知らない世代に対する戦争世代の危機意識がこの曲には如実に反映しているだろう。そうした状況の中、ムトーの訳が原詩の内容を日本のコンテクストに移し替えたものとなつていても、ある意味で当然である。

辻俊一郎『フォーク運動 二十五年目の総括』（新風舎、二〇〇一）が説明しているように、ポップ・テイランのアルバム『時代は変わる』（一九六三）に収録された「ノースカントリーブルース」が、真崎義博の訳詞で「炭坑町のブルース」として真崎により歌われ、さらに同じ曲で中川五郎の「受験生のブルース」となり、最終的に高石友也「受験生ブルース」になる過程には、「アメリカのフォークソングが訳詞や替歌を経て、ついにはすべての日本人の手による「日本のフォークソング」へと脱皮していく」という意味合いがある。それは恐らく、（翻訳）行為（何を翻訳するのかという選択）そのものが、他国の文化ではなくむしろ自国の文化的状況を映し出すという事態であるということの、典型的な事例であろう。そして、ムトーの「ヒロシマ」の訳詞が指し示しているのも、ムスタキの曲や思想、想いというよりも、むしろ当時の日本の状況そのものである。ヒロシマは、「ビルが建ち並び／傷あとをかくす」というような変容を確かに迎えていた。ムトーの歌詞では「何時か遠くなる／遠くヒロシマが」と繰り返され、原爆の記憶の希薄化が確かに訴えられている。被爆者の高齢化と語り部の減少という現在の問題を先取りするような問題意識は、ある程度評価されても良いだろう。

しかし、ムスタキの詩を見ていくと、このフランス語で歌われ

た曲が持つ抑制された希望の形は、非常に興味深いものに映る。例えば、「彼女はたぶん明日やってくるだろう」というリフレインは、「彼女」の内実、つまり何が来るのかを明示されないまま繰り返され、末尾でそれが「平和」だと分かる仕組みになっている。だが、次々と提示される、「彼女」（平和）をもたらずべきものは、その異質性によって私たちを混乱に導く。例えば日本語訳された「鳩とオリーブの木」「囚人の苦しみ」「なら咎のない子供たち」は、単なる象徴（シンボル）に過ぎぬものであったり、囚われの身となつているために現実への働きかけの出来ぬ者であったり、また実際に無力である「子供たち」であったり、およそ実行力の乏しいもののイメージを帯びている。しかし、それが「平和」を導くとするムスタキの詩は、もちろん原爆を他人事と見る外国人の視線とも受け取れるだろうが、他方で「平和」の実定性を宙づりにするような面も持っているのかもしれない。

ムスタキは、平和がほとんど実現不可能であることを理解した上で、皮肉を込めてこの詩を書いているわけではなからう。それゆえに、この歌詞の第三番が示している普遍化（抽象化）は危険にも映る。「すでに死んだ者たちすべて」と「まだ生きている者たちすべて」、つまり「あらゆる者」というここでの普遍化は、人類全ての希望として「平和」があることを、いささか楽観的に訴えている。当然ながら「うた」には、特にメッセージ性を持った「ヒロシマ」のような「うた」には、こうした楽観的な普遍化（抽象化）が不可欠の要素であろう。

しかし「彼女はたぶん明日やってくるだろう」という繰り返されるフレーズは、「平和」が「明日やってくる」のような身近なも

のであることも印象づける。もし「明日」という近い未来に、到底実現不可能な「平和」（平和をあらゆる戦争・紛争のない状態だとすれば）を置いたのだとしたら、それは皮肉以外の何ものでもない。

結局のところムスタキは、「明日やって来る」とされる「平和」そのものを、私たちが「ヒロシマ」というタイトルから想起するものとは違うもの、日々の生活の喧噪に紛れて生きる人々にとって微かに夢みられるような仮初めのもの、生を辛うじて支えている希望、そういったものとして描き出そうとしていたと思われる。「ヒロシマ」を、普遍的ではあるが、もっと身近な生の周辺に遍在するようなものとして提示すること。そうした発想は、映画『二十四時間の情事』（アラン・レネ監督、一九五九）とよく似ている。個人の恋愛を、「原爆」という大きな物語に回収されることなく絶対的な体験として対置しようとしたこの映画を、ムスタキは果たして観ていただろうか。

注

「ヒロシマ」の日本語訳は、非常に言葉通りにかつ正確に訳していると判断される朝倉ノ二氏ものを引用させていただいた。ブログ「朝倉ノ二」の〈歌物語〉の二〇一五年八月六日の記事「ヒロシマ Hiroshima」(<http://chanteable2.blog.fc2.com/blog-entry-272.html> 二〇一八年一月 一五日閲覧)を参照。